潮流

暖冬とインフルエンザ

NPO法人未来副理事長
鳥取県中部医師会副会長
松田　隆

気象庁は三月一日に、今冬（昨年十二月―二月）の日本の平均気温は平年に比べ一・五二度高くなり、一八九九年（明治三十二年）に観測を開始して以来、一九四九年と並び「最も暖かい冬だった」と発表しました。降雪量の少なさや日照時間の長さなども過去の記録を更新し、青森市では約七億五千万円の除排雪費節減、市民からの雪に関する相談・苦情件数も昨年の約15％と激減。逆に、民間の除排雪業者やスキー場、さらに冬物衣料や暖房器具などは売り上げが下がり、鳥取の冬の味覚の松葉ガニも消費者が鍋物を敬遠しがちになったため、需要が減少し、「厳しい冬」となったようです。

この暖冬の影響でしょうか？インフルエンザの流行もなく、当院の待合室も厳冬状態で、一人一人の患者さんへ十分時間を取ることができました。しかし、二月の半ば過ぎから、遅かったインフルエンザの流行が始まり、県内でも学級閉鎖が増えてきました。そして、インフルエンザ治療薬タミフルの服用後に異常行動で死亡する事例が相次ぎ、薬との関連性がはっきりしない中、二月二十八日に厚生労働省は、タミフル服用の有無にかかわらず、インフルエンザ感染時に異常行動の恐れがあることを患者や家族に説明し、少なくとも二日間は慎重に観察するよう医療関係者に文書で呼び掛けました。

一方、子どもを看（み）る親からは「心配で子どものそばを離れることができない」という声が聞かれますが、今のように医療が進歩していなかった昔は、家族が一晩中付きっきりで傍らにいて、ぬれた手ぬぐいで頭を冷やし、温（ぬく）もれば交換し、病気の回復を祈ってくれました。ここに本来の医療・看護の原点があるように思います。今は熱さまし用のシートをおでこに張って、解熱剤を使って楽に過ごすことができるようになり、あまり手をかけなくてもいいようになりました。

しかし、インフルエンザに罹（かか）って、高熱でしんどい時ほど、家族に寄り添って傍らにいてほしいと思うのは私だけではないと思います。病気になって、苦しく、不安な時に、やさしく看病された経験を持てば、自分の周りの人が、同じ状況になった時に、きっとやさしく看病してあげることができます。子どもの時に、看病された経験があれば、相手に対するやさしさや思いやりを持った大人になります。こういった意味でも、子どもが病気になった時に親が看病するために仕事が休める「子ども病気看護休暇制度」の整備は必要で、企業の理解と協力が不可欠です。このインフルエンザの問題は、医療のあり方を考え、子どもの大切さをもう一度見直し、ゆっくりとした家族の時間を取り戻す良いチャンスと捉（とら）えることもできます。

今年は、流行時期は遅れていますが、必ずしも流行規模が小さいとは限りません。なるべく人込みに出かけることを避け、外出時はマスクをし、帰宅時には手洗い、うがいをし、室内は適切な湿度を保ち、換気も必要です。せき、くしゃみが出る場合には、マスクをしたり、ハンカチなどで鼻や口を押さえ飛沫（ひまつ）を飛ばさないように、周りの人への思いやりも大切です。栄養バランスのとれた食事をして、温かくして、十分な睡眠をとりましょう。

暖冬の影響で東京の新宿御苑では、平年より三週間も早くカンザクラが散り始め、ピンク色の花びらが地面を彩っているようですが、やはり、日本の四季は冬寒く、夏は暑くなければ、いろいろなところに影響が出るようです。談合問題をはじめ、大人のモラルの低下によって起こる事件もけじめのなくなった季節の影響で、人間の感覚が麻痺（まひ）してきたせいかもしれません。

（倉吉市）

2007. 3. 7